

Gist-grasping の実際と指導

金沢大学教育学部付属高等学校

英語科 伊藤 俊一

I はじめに

1 受験英語の功罪

高校英語教育は、現実には、大学入試に大きな制約を受けていることは否定できない。特に最近のように、大学入学志願者が年々増加の一途をたどっているときにはなおのことである。受験英語の功罪を考えてみるとき注意すべきことは、高校英語教師が自分の教授法の旧態依然たる状況を弁護し、弁解するため、すべてを受験英語の罪にする態度である。大学入試さえなければ理想的な英語教育がなし得るといような口吻は厳につつしむべきであろう。

受験英語も時代の要請、社会一般の英語に対する認識の変化に従って変ってきている。以前にみられた、難句の頻出、細切れの英文解釈、文法偏重で重箱の隅を楊枝でほじるような細かな詮索、などが次第に比重が小さくなり、現在では、発音、大意の把握、長文の読解力テスト等、多方面から実力を判定することのできる良問が多くなってきた。これは戦後の新しい傾向として生まれ、今後ますます助長されることが考えられる。しかるに、高校ではともすると従前の受験英語に毒された暗号解読式解釈、全体の見通しの欠けた、部分的コマギレ的理解に終始していた。これでは高校英語教育はいつまでも停滞することになる。

生徒の英語学習への動機づけとして、大学入試は大きな役割を果たしているといつてよからう。大学受験生を集めての座談会で、東京のある大学の助教授も感想として述べていたことであるが、英語の語い、文法の規則など細かい点に関しては、おそらく生涯で一番物を知っているのは大学受験の時期であろう。ただ問題なのは、それぞれの進む分野に必要な英文の書物を読んで、自分のものにしていく能力に欠けていることである。おそらく彼等は、英語を道具として使いこなしたり、楽しみを、利益を、自分の研究への資料を得たりする経験をせずに終るのではないだろうか。生きた言語であり、多方面に亘ってその力の発揮を期待される、国際語ともいべき英語の学習は、何かもっと別な方向へ進むべきであろう。この方向と、大学入試のための英語学習とは決して矛盾するものではないと信ずる。

2 中学英語との関連

近年、構造言語学の紹介とともに、新しい入門期の指導法が導入され、戦前からの oral work を中心とした教授法がさらに強力で推進されるに至った。綿密に段階的に配列された材料を用いて、機能語の用法、英文の基礎的構造を、口頭訓練を主としてたたき込み、英語の言語習慣を定着していく方法である。初期の段階でしっかりこの習慣が確立しているかいないかで、高校に於ける学習の効果が大きく左右されることは言うまでもない。

中学においての、比較的 intensive な進め方に対して、高校では extensive な方向へ移行せざるを得ない。教材の構文の複雑化、語いの増大がその理由である。語いについては、文部

省の指導要領英語Bの項目に、第1学年1,000語、第2学年1,200語、第3学年1,400語程度、計3,600語程度と指示してはあがるが、これは最低の線とみるべきであろう。構文の複雑化については言をまたないところであって、いきおい生徒の自主的学習に負う部分が非常に大きくなる。教室での限られた学習時間で行なう精読だけにたよってはいは、生徒はいつまでも英語に対して謎ときの態度を捨てられず、道具として使いこなすことは出来ないであろう。言語は道具であり、内容の通る groove であり channel である。groove は意識しないで、内容が抵抗なく心に定着していくという段階に達しなければならない。この場合大きく close-up して行くのが多読、速読、大意把握能力の養成ということである。精読と対立するものとしてのみならず、精読を支え、部分に於ける正確な意味理解に役立つものとしても、多読、大意把握能力が重視されるべきである。

3 リーディングと大意把握

リーディングはその目的に応じて種類が分かれる。必要な情報を得るために、出来るだけ速く読むような場合と、一定の速度は勿論保ちながらも、楽しみのために、表現を鑑賞しながら読む方法である。

前者の場合、大意把握はほとんど最終目標ともいい得る重要性をもつ。読者が問題意識をもって情報を求めて読む searching-type reading では skimming (すくい読み) が最も効果がある。West の著書 Learning to Read a Foreign Language (1955) には、このタイプではベンガルの一少年が1分間に約1,200語まで速度をあげることができたことが報告されている。故ケネディ米大統領が1分間に2,000語読んだという話が伝えられるが、勿論この種類に属する読書のしかたである。

これは、飛行機で目的地につき、用事を済ませて、折返し超特急であわただしく帰るビジネス本位の旅行のような読み方であるが、又全然別の、ゆっくりした観光本位の読み方がある。途中の風物、景色などを楽しみながらする旅行のような低徊趣味の読書がそれである。超特急型では 'what' すなわち内容、情報が問題となるに対して、低徊型では 'how' すなわち「いかに」表現されているかを味わうのである。前者は人文科学も含めた science 一般及び報道、後者は literature に対しての「読み」の態度である。

それでは後者の場合、大意把握能力はどのような意味をもつか。個々の単語の意味は文の意味によって決定され、文は又段落の意図のうちにそれぞれの位置を占めるものである。従って段落の意味を正確に汲みとることが、部分の位置を知るのに重要な役割を果すのである。個々の単語の意味を把握することと大意を把握することが、我々が文を読みすすむときお互いにどういう働きかけをしていくのであろうか。

大意を把握するためには細部の正確な理解が必要なことは言うまでもない。勿論この場合の理解とは、文法的、語法上のそれを基礎とした内容の理解である。実際のプロセスは次のようになっているのではなからうか。

ここに J. B. Priestley の "Delight" の一部を例に読書の心理を考えてみたい。

先づ読者は、随筆集の "Delight" という題から内容のある程度予想する。この予想あるいは先を予見する、ということが重要な意味をもつので、この思考作用がなければ読書は考えられない。読書とはこの予想が、次々に目が行を追っていくにつれて、あるいは満たされ、あるいは裏切られていくプロセスである。満足感と意外感が適度に織りなされて、読者の心は新しい認識の世界へ導入されていく。すぐれた文の場合、読者の心は自律的に働きはじめ、著者の

結論に自らも参加し、心よい対話のあとのように、さわやかな満足感が得られる。

“Delight”をCODで調べてみるとn. High pleasure, thing that causes itとある。作者は身辺百般の事に関する感想を、「喜び」を中心に述べるらしい、と予想出来る。併し逆説的な意味にも使い得るので、不平不満、批判も十分に題材になることも予想される。現に、ニューヨーク市については、そこを去ることが、世界中で最も楽しい旅を感じさせてくれる、などという皮肉な書き方をこの著者はしているのだから。本文に入ろう。

After finishing a piece of work that has been long and rather difficult, I have a sense of satisfaction that can expand into delight.

単語を追っていくにつれて、ほとんど無限のひろがりをもつ予想が限定されていく、a piece of workは非常に一般的な語で、あらゆる仕事を含むが、著者が作家であるから、原稿書きであろうと見当がつく。「ときに歓喜にまで高まり得る満足感を得る。」とあるので読者は、満足のいく仕事が出来たのかなと次を予想する。この予想は見事裏切られる。

This does not come from surveying the work done, for at these times I am rarely sure of the value of what I have just created, am more than doubtful if my first intention has been fulfilled, and may even wonder gloomily, while I hold the work in mind, if I have not been wasting time and energy.

読者の予想を裏切ることは作者も意識しているわけで、for……以下がその意外感を理由づけ了解を求める。自分の仕事が「時間と精力の空費であったのではないか」と疑う作者に同精し共感を持ちさえする。そういえば第一文にlong and rather difficultという語句があったな、と了解する。読者の中には第一文のこの語句を見のがさず、第二文を予想したものもあるであろう。その読者は、「こうなると思った。」と自分の予見能力に満足するであろう。

No, the delight springs from a sense of release.

この第三文ではじめて満足感が何に起因するかが明らかにされる。併し読者には大体見当のついていたことで、充分納得すると共に「解放感」ということばが強く印象づけられる。

I have been in prison with this one idea, and now, I feel, I am free.

大仕事をかかえて書齋に閉じこもることのつらさ、そして終えたあとの自由さが表現される。以上の解放感を充分自分のことのように感じとってこそ、次の文が理解でき、共感をもてるのである。

Tomorrow, ten times the size of last Tuesday, is suddenly rich with promise. Time and space are both extended.

苦しい仕事を終えて、さて明日は火曜日、先週の火曜日は仕事に追われて自分の体であって自の体でなかったようだった。明日という日は無限の長さで広い場所を提供してくれる。何をしようか。何でも出来るぞ。

I catch a glimpse of fifty new ideas, flickering like lizards among the masonry of my mind, but I need not bother about them. I am now the master and not the slave.

このあとに続く部分こそ、作者がしたいと思いつつも仲々出来ないことがわかる興味ある部

分である。

I can go to China, learn the clarinet, read Gibbon again, study metaphysics, grow strange flowers in hothouses, lie in bed, lunch and dine with old friends and brilliant acquaintances, look at pictures, take the children to concerts, tidy up the study, talk properly to my wife.

旅行、音楽、読書、哲学研究、園芸、ごろ寝、旧友や知己との交わり、絵画、子供のおつきあい、書斎をキチンと取りかたづけること、妻にやさしい言葉の一つもかけてやれる。

最後の三つの例は、平凡なことであるがために一層実感がこもっていて読者の共感を呼ぶ。「さてはこの作者、平常は忙しくて、子供とのつきあいが出来ないし、書斎はとり散らかしで、奥さんを怒鳴りつけることもあるんだな、俺と同じだな。」又ある読者は思うかもしれない。「生きるということは楽しいことだな。子供達と遊んでやれるということは。妻と語り合えるということは。」

What a world this is to be free and curious in! What a wealth of sunlight and starlight and firelight.!

本当にこのとおりだという気持が素直に読者のものとなる。さて結びの文がつづく。

And so for a little while, before the key grates in the lock again, there I am, out and free, with mountains of treasure before my dazzled eyes. Yes, there comes a moment—just a moment—of delight.

再び牢獄の錠前に鍵がギョツときしみ、作者は仕事に追われる。それまでの束の間は、解放感にひたり、何でも出来るのだという自由感を味わう。結局はしたいことの何分の一も出来ずに終るのだが。

この Priestley の文は低徊型に属するわけで、この種の文を、ビジネス特急式に skim したら味わいなくなる。「仕事を終えたあとの解放感の喜びについてのべている。」ということになるのであろうが、これでは何とも味気ない。暇を持てあましている人間がともすると忘れがちな、平凡な生の営みの素晴らしさ、楽しさを、仕事に追いまわされている人の眼を通して感じとらせてくれる実例、比喩の面白味が大切な要素である。なぜ China が出て来るのか、Gibbon があげられるか。紅衛兵のあばれる騒がしい現代の中国なら、旅行の例としてはまづあげないであろう。Gibbon が The Decline and Fall of the Roman Empire という全6巻に亘る歴史書を著わしていることを知らないでは実感が伴わないであろう。

部分の意味と全体の意味は、どちらが先、どちらが後というものではなく、有機的な関連をもつのだ。お互いに影響しあい、決定づけていく。「木を見て森を見ず」ということばがあるが、森を見るためには、木の1本づつをよく見ないではやはりだめなのだ。ここに読書の難かしさ、面白さが存する。しかもここに読者の目が加わって意味が瞬間瞬間に作り出されていくのだ。活字、音声、音声のもつ意味、全体の意味というものが支えられているというより、読者が作っていくのだ。文脈、読者の体験、考え方などいわば「過去」を頭に置き、文の先を、「未来」を、予見しながら、それらの函数として、現に眼が追っている語句、文の意味を心に定着させていく作業が読書なのだ。いわば全人格的な作業なのである。

以上、多少の冗長をかえりみず、読長の種類とそれに応じた読書方法、速読と精読の関係、また両者に欠くことの出来ないものとして全体を把握する能力の重要性について述べた。

II 多読指導の問題点

1 言語習慣の確立

多読、速読の指導を効果あらしめるためには、生徒が、英語の基礎的言語習慣を身につけていなければならない。高校1年の段階では、急に難解な構文、語いを導入せず、少なくとも第1学期の間は、中学4年の心づもりで **Oral work** を中心にして授業をすすめ、能力差、あるいは生徒の受けた授業の差を地ならしする必要がある。生徒の現在達している段階を出来るだけ正しく把握して指導をすすめなければならない。

2 音読との関係

教科書の音読は、教室に於て行なう作業として重要な役割をもつ。活字を音声に還元するわけで、発音、イントネーション、ポーズ等の正確を期して正しく音読することは理解への重要な鍵となる。同時に、正しい理解がなければ正しい音読はできないといえる。したがって、正しい音読は理解そのものともいえる。併し音読の陥りやすい弊害もはっきり意識する必要がある。先づ、個々の単語の発音に心が奪われる結果内容がともすると意識からすべり落ちてしまうことである。いわゆる空読みに堕してしまうのである。テキストの理解に先だつて行なうリーディングは大体この傾向がある。一段落読ませてから大要を言わせると、生徒は再び同じ段落を黙読あるいは唇読してから要約をはじめることが多い。音読してから英語で **outline** をいわせる場合、時間が充分支えられると、彼等の心の中で行われるプロセスは次のようになる。

活字→音声+活字→和訳→要約→英訳→音声

実に二重の翻訳が行われている。スピードの落ちるのも当然である。このような読み方は論外としても、正しい理解を伴った音読もやはり速度の点で決定的な限界がある。West の **Learning to Read a Foreign Language** によれば、音読は毎分160語が限度である。教室での音読の重要性を認識しつつも、多読を目指すためには、**silent reading** の練習が肝要になってくる。次に速読の障害となる要因をまとめてみる。

3 速読の障害となるもの

- (イ) 個々の単語に気をとられて、**group** の意味、全体の意味を読みとることをしない。
- (ロ) 翻訳読み。語順の違いにより、目が逆行することが多い。
- (ハ) 未知の語が多いと目が固定することが頻繁になり、進捗がにぶる。
- (ニ) 音読のくせがぬけず、たとえ声には出さなくとも唇を動かしたり、心の中で声を出して読む。

4 障害除去の方法

上記障害を除去するためには、生徒の学習段階に応じた材料を精選しなければならない。多読の材料としてみた場合、現行の高校英語リーダーは不適當である。その理由は、各課が短いことである。精々3ページか4ページであるから700語から800語を出ない。しかも文体ががらりと変り、新語の既習語に対する割合が高い。いきおい副読本として何か適切なものを選ぶことになるが、選定にあたっては次の諸点に注意したい。

(イ) 内容

内容は、生徒の知的水準、興味、関心に合致しなければならない。読書心理からみてもこれ

が重要な点となる。英語能力と知的関心の対象とのズレが仲々克服しがたい。1, 2年では **Simplified materials** を用い、2年後半あたりから原典にあたらせたらよいかも知れない。

(ロ) 語 い

未知の単語が多く出てくれば、当然速さにはぶる。eye-span は狭まり、眼球運動が固定し、また後退現象が生ずる。新語の既習語に対する割合は1対50位までにとどめた方がよからう。1頁400語位の本なら、各頁に8~10語位はよいが、この新語については前後の関係などで類推出来ることがのぞましい。Simplified texts の問題点としてあげられることは、使用してある語のみを検討して、その組合せによって新しい意味の生ずるのを無視している点があげられる。とくに take, put, get など副詞、前置詞との組合せで全然別の意味をもつようになる語は日本人生徒にとって実にまぎらわしい難関である。むしろ長い単語の方が解り易く、生徒もよく知っていることが多い。

(ハ) 文法, 構文

単語が妥当であってもなじみのない構文、複雑な構成をもった長文では、多読用の教材としては、少なくとも初期の段階では、適切さを欠くものである。実際に1年生のために市販の Simplified texts を色々調べてみたとき感じとられたことであるが、米国人や英国人にとって解りやすいくだけた表現が、必ずしも我々外国人にとってとっつきやすい表現ではないことが往々にしてある。特に口語的表現にそれがみられるようである。教材を選ぶにあたっては、いうまでもないことだが、教師が必ず現物にあたってみななければならない。単に語いの制限のみに頼ってえらぶと、生徒の馴れていない口語表現の説明に思いがけぬ時間をとられることがある。

Ⅲ 学習指導要領の示唆するもの

指導要領第2章第7節外国語英語Bのうち読むことの項目には言語材料および題材について次のように述べてある。

(ア) 言語材料は、現代の標準的な英語を扱うことを原則とする。

(イ) 略

(ウ) 新語の数は、中学校に於ける学習の基礎の上に、およそ3,600語程度とし、その中に運用度の高いものを含めるものとする。この場合、基幹語、派生語および合成語は、それぞれ1語と数えるものとする。

新語は、全日制の課程の各学年(定時制の課程においては、これに相応する学年とする。)に次のように配当するものとする。

第1学年 およそ1,000語程度

第2学年 およそ1,200語程度

第3学年 およそ1,400語程度

(エ) 略

(オ) 略

(カ) 題材は、主として英語国民の日常生活、風俗習慣、思想感情、地理、歴史、制度などに関するものならびに科学技術に関するものなどから変化をもたせて選択し、特定のものに片寄らないようにする。

題材の形式は、主として説明文、対話、物語、伝記、小説、劇、詩、随筆、論文、日記、手紙、時事文などとする。

なお扱い方として次の示唆がある。

イ 語，句，文の意味を直接英語から理解することに習熟させる。

これは所謂直読直解能力の養成を旨とするもので，多読への重要な足がかりとなる作業である。なお学習活動については項目ウとして次のことばがある。

ア) 範読にならって音読させる。

イ) ひとりで音読させたり，集団で音読させたりする。

ウ) 対話や劇を分担して音読させる。

エ) 語，句および文をパラフレーズさせる。

オ) パラグラフなどの大意をつかませる。

以上，大体精読を主とする教室での活動が述べられているわけで，積極的に多読，速読についての言及はないが，つづく指導計画作成および指導上の留意事項の(6)として次の示唆がある。

直接英語から理解する能力を養うために，学年の程度よりも平易な英語で書かれたものを多読させることや，平易な英英辞書を使用させることもよい。

どちらかといえばやや消極的な示唆にとどまっているが，英語を道具として使いこなしていくためには，直読直解能力の養成は必須のことであり，またその能力の錬磨には，精読を基礎としながらもそれを超えた，速読，大意把握能力の訓練が必要であろう。母国語並みとはいかなくとも，少なくとも1時間に10ページ位の速さで英文書が読めるようになってほしいものである。生徒の自主的学習にまかせる部分が大いことは勿論であるが，教師としてどの程度指導の余地があるか。方向づけが可能であるか。以下本校で実施した方法を述べ，反省していきたい。

Ⅳ 本校での試案

1 高校英語への導入

高校英語といっても中学で教える英語と本質的な違いは勿論ある道理もないが，生徒の学習能力度の上で，また読み書きへ重点を移行するという点で扱い方の違いがある。これについてはすでに述べたことであるが，第1学年で特に重要なことは生徒の能力を正しく把握することである。そのため次の要領で特に長文読解力のテストを実施した。

3月中に入学内定者全員に実施。比較のため同一テストを4月になってから2年及び3年にも課した。

材料は800語からなる短い物語で，語いは中学用テキストで使用される範囲にとどめ，それ以外の約20語には和訳を付けた。設問は全部で30題でⅠⅡⅢのグループに分けて10題づつである。Ⅰグループの設問は内容に関する英問で選択肢が3つの中から正解を選ばせるもの。例をあげると：

What did the doctor say about his physical condition ?

a that his physical condition was excellent.

b that he was very ill.

c that he would probably have a heart attack.

Ⅱのグループは10の文から内容について正しいものと違っているものの判定をする。

Ⅲの間は空所に本文から単語を選んで入れるもの。

設問はすべて英語で語数約450、本文の800語と合計すると1,250語になる。結果は次のようになった。時間は45分で実施した。

	問題Ⅰ正解者	問題Ⅱ正解者	問題Ⅲ正解者	全問正解者	平均点
第1学年 165名中	62	29	68	23	77.8
第2学年 165名中	118	87	126	66	94.8
第3学年 167名中	149	131	147	108	98.0

このテストは特に速読能力をみるというはっきりした目標はもたず、理解力をみるのを主眼としたので、時間は十分に与えた。ただ3年生には参考として所要時間を記入させた。その結果は次のようになった。

35分	毎分あたり35語	40名
30分	〃	40語 70名
25分	〃	50語 33名
20分	〃	60語 20名
15分	〃	80語 4名

一年生について、このテストの結果また、中間テストの結果をみて、問題のある生徒を個別に呼んで指導し、特に中学で学んだ英語の復習を十分にさせた。この場合、研究社の「高校英語の基礎」旺文社の「英語の基礎」等を指定して読ませ、質問をきいてやったのが有効であったと思う。

以上の個別指導を加えながら、主として一年生には、自主的に辞書を億劫がらずにひく癖をつけるため、予習に重点を置いた。毎時間必ずパラグラフ各の大意を言わせ、それから細部の重要構文の drill へと進むようにした。暗誦文を利用した substitution, oral composition, 等精読、訓練にクラスでの学習活動は集中した。多読の指導は夏休み頃から徐々に軌道にのせていくのが妥当と思われる。夏休みには80ページ程の平易な物語を読ませ内容についての設問でしめくりをつけた。教科書が大体十一月頃には読み終えるので、新しくまとまりのある物語を与え、大意把握、多読へと方向づける。ただしテキストを事前によく検討して、生徒の感じるであろう困難点、たとえば語い、構文については、なるべく英語による定義をあたえたり、類例をあげて説明するなどして抵抗を少なくしておく。

大意を英語で述べさせるときは、正確な full sentence を要求せず、大体要点をついていればよしとすることが大切である。どうしても生徒の注意は個々の単語に向いてしまい、文相互の、全体の流れの中に於ける軽重、主流をなす文とその傍証、例証にすぎない文との区別が仲々つきにくいのである。全体の流れ、バランスを絶えず意識しつつ部分の理解に向わせるのが肝要である。それには、難語、難構文の少ない、論理的に無理なく次へつながっていくような文体が望ましい。

2 第2学年 — extensive な方向へ

大体1学年後期と同じ形で、精読を重視しつつも、extensive な方向へもっていくのが主眼点である。

先づ1年学年末に課する宿題，夏休みの宿題，冬休みの宿題などは第1学年で実施したものに準じて，その後行われるテスト，平常の授業での難易度などを勘案して **Simplified Reading materials** を適宜選択する。そしていよいよ2年後半から3年にかけて，原書にあたらせて手ごたえのある読書を経験させることになる。

3 第3学年—補助教材とその扱い方

前述の読みの心理でも考えた如く，理解を伴ったバランスのとれた読書とは，反射的，表面的な逐語訳ではなく，文脈，段落相互の関係，著者の意図などから一貫した線に沿って，現在眼で追っている語句の意味を汲みとり，先を予見しつつ，心の中に **image** をつくりあげていく作業である。直読直解の技術をどうしても必要とすることは勿論である。日本語の語順にいちいち置き換えたり，受験参考書に公式のように太字で印刷してある構文がいつまでも目につくようではいけない。参考書に便宜上「あとから訳すべし」云々といった技術を示してあるのが習慣となり，円滑な自然な読みを妨げているのである。この悪癖を直すには，先づ生徒が無意識に行っているこの不自然な読みの作業を意識させ，除々に取り除くようにしてやるのが大切である。適切な材料を前述の諸問題点を考慮に入れて選び，翻訳読みの時間を与えずに黙読させて，内容に関する質疑をすることにより次第に克服しようと思う。

3年生を対象に次のことを試みてみた。

(イ) リーダーの各課につき，少なくとも900語から1,000語以上の，各課に関係ある補助教材をつける。

(ロ) 各自の英語力，好みを考慮に入れて，一冊英書を選ぶ援助をしてやり，時間をもうけて質問を受けてやる。

(ハ) の補助資料は語学的 **work book** を意図するのではなく，内容の発展あるいは意識的計画的脱線である。たとえば使用中のリーダーとは次のように関連づけていく。

現在3年生使用の教科書は，修文館の **Aoki's Evergreen Readers 3** である。

第2課 **Controlling the Mind** の中に精神集中の一方法として作者は **Marcus Aurelius** あるいは **Epictetus** のことばを読み，じっくりと考えることを示唆している。当然ここで **Aurelius** なり **Epictetus** のことばはどういうものなのかという興味が湧いてくるが，**manual** をみても見あたらない。結局 **Harvard Classics** 叢書の一冊に英訳を見つけて，生徒の力にあったものを選んでタイプし印刷して与え，大意をいわせる。

第3課 **Parliamentary Chambers** のためには，**Oxford** の **Home University Library** の一冊 '**Parliament**' から，同じ内容について違った表現でのべてある箇所を含めて与え，教科書の文と対照させて，一致した内容をもつ部分を指摘させたり，**パラフレーズ**の練習をさせる。

第6課 **He Starts On His First Trip Into Space** ではシェパード中佐のをせたロケットが弾道飛行に打ち上げられる模様が述べられているが，この補助資料として **English Echo** からグレン中佐の乗り組んだ **Friendship 7** の発射の状況を録音したフォノシートをえらび，数回聞きかせ内容に関する簡単な **Questions and Answers** を行って理解度をチェックしてから，**narration**，グレン中佐の声，地上ステーションの指示，故ケネディ大統領の祝辞などの全文をプリントして与え，耳で聞いただけの場合と比較させ，理解を徹底させた。またこの課と関連させて，かねがねジャーナリスティックな英語，**up-to-date** な資料をと計画していたので，折よくアメリカ大使館から送って来た「宇宙空間に関する条約」についての教書及びその条約

全文の英語テキストをコピーして与えた。5,000語からなり、最初は文体になれずとまどいがみられたが、半分ほど読み進むうちに、語い、文体共に素直に頭に入ようになったという感想を生徒は述べていた。同じ語、構文が繰返し出て来るので自然に身についたようである。

はじめての試みとして今年の1学期にしたことは、他教科と関連を持たせるということである。Shakespeareの英語にそのままぶつけることはかなり冒険であると思うが国語の教科書に中野好夫氏の訳でジュリアス・シーザー第3幕2場、有名なBrutus, Antonyの演説の場が載っているのを幸いに、国語の担当教師と打合せをしてタイミングをあわせて英文をあたえた。弁論の一つの型として、その盛りあげ方、きき手の心を表面では抑えるようにして、かえって除々にきき手、すなわち大衆の心をriotに駆りたてるアントニイの心憎いまでの人心収攬、フルータスの真面目ではあるが大衆の心理を解しない学者的態度など、国語の授業時間で扱ってもらった。次に原文で、語法上の注意をしてから細部のつながり具合、感情移入の仕方、リズム、イントネーション、強弱などに注意を払わせつつ、Old Vic座の吹込んだレコードを鑑賞させた。これは受験とかdrillとかの見方からすると邪道であるかも知れないが、決して無駄になったとは思わない。語法上の古さ、語順の変化などは、リーダーでの詩の扱い方と同じく、現代の英語で言いかえて違いを意識させた。なんといっても生きた、魂のこもった、脈々と血の通った英語を一流の俳優が鮮やかに音声を通して再現してくれるのである。生徒の感想にも、「英語で、これだけ豊かな感情表現、緩急による深い意味表出が可能だとは思わなかった。」「日本語訳とはまた違ったスピードのある躍動感が感じられた。」というのがあった。語感の養成に多少の役には立ったと思う。

今後機会をみて、理科・社会の科目とも進度と目みあわせて関連を持たせたいと思う。特に国語では、古典の源氏物語のWaley訳を利用して対応させたり、論語、孟子など英訳と対照させるのも試みてみたい。興味づけ、関連づけて、出来るだけ英語を道具として使いこなす方向へもっていきたい。もちろんリーダーの精読、drillと並行してであるが。

(ロ) 英書にあたらせるには春休み、夏休みを利用するのが最も効果的であろう。リーダーではその性質上あまり一方に偏した材料ばかり集めるわけにはいかないので、varietyには富むが、課毎に文体、用語法が変化し、文体に対する感覚は得られない。一人の作者の文にかなり長く接してはじめて特有の表現への好み、語いの選択感覚を感じとれるのである。また、文体を味わうという比較的高度な境地は別としても、100ページ、150ページ位読みすすむうちに、はじめ1時間2～3ページであった速さが5～6ページさらに10ページ前後にまでは達するであろう。そう次から次へ新しい単語が出るわけでもなく、一人の著者の使う構文もおのずから限度があるからである。この場合事前によく注意しておくことは、読みの態度がリーダーのそれとは違うことの生徒への徹底である。つまり単語や構文を覚えようと意識するなということである。内容を追うことに注意を向けているうちに、無意識に自分のものになるようにするのが最も自然な形である。単語帳を作り、構文を丸暗記することになれている生徒は、この読み方に漠然とした不安を感じず、その精しい読み方は別にリーダーなり参考書なりでやることにして、一応ははっきり切りはなすのが肝要である。

能力差の点を考慮に入れて、休みに入る前に色々な作品を紹介した上で、各自の相談にのってやり、一冊を選んでやった。次のものが主な選択源である。

開拓社 ラダーシリーズ 註釈付
学生社 アトム現代英文双書 単語註釈付

原書を読みあげた、という満足感と自信をつけるためには、力のあるものには思いきって註

なしの原典にあたらせるのが効果がある。数人のグループを作って読ませ、話し合わせ、さらに問題点があれば質問に来るという形でいくのがよい。ペンギン叢書などから次のものを読んだものが多い。

- W. S. Maugham : The Summing Up
 : Short Stories
B. Russell : The Conquest of Happiness
 : The Problems of Philosophy
A. Toynbee : War and Civilization
G. Orwell : Animal Farm
A. Hemmingway : The Old Man and the Sea
L. M. Alcott : Little Women

土曜日午後に時間をつくって質問を受けたが、よく利用された。なお模試や定期テストには、上記の作品から大意把握問題とか、別文による真偽判定問題とかを出して意欲をもたせ、興味づけるようにつとめた。

今後の問題は、英文になれることと並行して、語法、語いの passive な理解から、整理された確実な知識へもっていくことである。

V 結 び

大意把握という作業を広い意味にとって、単に速読のたすけとしてでなく、精読にも欠かせない重要な全体感覚としてとらえ、その意義、問題点を考察し、方法を考え、実践の反省をした。

要は、精読、多読いずれにもかたよらず、バランスのとれた指導をすることであろう。全体的見通しの上に部分を理解し、部分の正確な理解によって全体像をきずきあげる、ということ絶えず頭において、現実の生徒の能力、興味をよく見て、資料の作成に、方法の探究に精進していきたい。

参 考 文 献

- I Morris ; The Teaching of English as a Second Language, London, Macmillan & Co.
Morris Isaac ; The Art of Teaching English as a Living Language, 研究社版
リヴァース ; 外国語教育と心理学, 紀伊国屋書店
小川芳男編 ; 英語教授法辞典 三省堂
英語教育 (特集リーディング) ; 1967 vol. XVI No.2 大修館